

● 中 部

水 野 みか子

コロナウィルスの影響で音楽界でも中止や延期が続く、演奏会のチラシや年間予定の情報は次々に無効なものになった。春シーズンの3ヶ月に予定されていた名古屋国際音楽祭は全7公演が中止された。

名古屋フィルハーモニー交響楽団は2月下旬から6月まで17回の公演を中止し、その間、動画配信によるアンサンブル演奏やインスタグラムでの楽員メッセージ等の発信を行い、7月からオーケストラでの演奏を再開した。再開後最初の演奏会となった「しらかわシリーズ vol.35」(7/3)は無観客(少数の招待客のみ)での開催、そして、第481回定期演奏会(7/10, 11)はベートーヴェンの《田園》のみを演奏し、入場者上限900名で開催された。小泉和裕指揮の2月定期でモーツァルトの第38番とR.シュトラウスの《英雄の生涯》において重厚感あるどっしりした響きを聴かせたが、7月のしらかわシリーズでは、太田弦指揮でメンデルスゾーン《真夏の夜の夢》とベートーヴェンの第7番で、二管編成で再出発した。秋からの定演は愛知県芸術劇場で催され、第482回定期は小泉指揮でベートーヴェンとブラームスの各2番の交響曲、第483回は広上淳一指揮でシCHEDリンの《ベートーヴェンのハイリゲンシュタットの遺書》、ショスタコーヴィチのヴァイオリン協奏曲第2番(独奏は客演コンサートマスターの荒井英治)と交響曲第9番、第484回定期は小泉指揮でワーグナーの《リエンツィ》序曲、ブルッフのヴァイオリン協奏曲(独奏は三浦文彰)とシューマンの交響曲第4番を取り上げた。12月の第485回定期はマキシム・パスカルを迎えてシャプリエ《田園組曲》、シマノフスキのヴァイオリン協奏曲(独奏は辻彩奈)、ラヴェル《クープランの墓》、ベートーヴェンの第8番という演目でダイナミックにエネルギーを弾けさせた。

セントラル愛知交響楽団は、第173回定期(1/10)でイギリスの作曲家作品を集めて角田鋼亮が明確な音楽性を示したが、その後中止や延期が続いた。6月の稲沢市民会館、7月のしらかわホールでの2度に渡る実証実験、そして8月の刈谷市総合文化センターでの「未来につながるコンサート」と題した演奏会シミュレーションを経て、9月に定演を再開した。角田指揮の第178回定期(9/25)はモーツァルトの交響曲第31番、イベールの《モーツァルトへのオマージュ》、プーランクの《シンフォニエッタ》という演目に変更された。第175回定期の振替公演(10/31)も角田の指揮で、プーニの《喜劇序曲》、レスピーギの《リュートのための古風な舞曲とアリア第一組曲》、メンデルスゾーンの交響曲第4番、第179回(11/20)は角田の指揮で、ブルッフのヴァイオリン協奏曲(独奏は島田真千子)とR.シュトラウスの組曲《町人貴族》となった。

中部フィルハーモニー交響楽団は、第69回定期(2/15)のあと、秋山和慶指揮予定だった第70回定期や創立20周年記念コンサートを延期した。第71回定期(9/20)には新首席客演指揮者に就任した飯森範親とチャイコフスキーのスラヴ行進曲、弦楽セレナーデ、交響曲第4番を披露した。

愛知室内オーケストラは新田ユリの指揮で第25回定演におい

てニルス・ウィルヘルム・ゲーゼの交響曲第6番をベートーヴェン《田園》とともに演奏し、下野竜也指揮の「新旧ウィーン楽派」では室内オーケストラならではの特色あるプログラムを組んだ。

コロナウィルスがはつきり認識された2月下旬までは、いつもの年と同じく名古屋音楽界も賑わっていた。「ミッド・ジャパン音の芸術祭」は、先端技術集積地としての中部地域でテクノロジーを活用した音楽表現を追求する、というコンセプトで新設されたフェスティバルで、三日間の期間に五回のコンサート(パフォーマンス)、4つの展示、2種類のワークショップを開催した(2/21-2/23)。ピアノの山内敦子のリサイタル(2/26)は、ショパンの練習曲作品10全曲とドビュッシーの前奏曲第二集全曲(それに「月の光」も)という規模の大きなプログラムにより軽やかではなやかな世界が繰り広げられた。「音楽クラコ座」は、「集中音楽」と題して5分以内の作品13曲(フランス、ドイツ、ポルトガルからギリシャやウクライナまで多様な国の作曲家の作品)を演奏し、楽しい現代音楽コンサートを実現した(2/8)。

3月、4月に予定されていた演奏会の中には、6月以降に延期され、第二波が来る前に間隙を縫って開催されたコンサートもあるが、タイミング悪く中止されたものも少なくない。実施できるかどうか、また、感染対応はどうすればよいかなど、不透明な様相の中で演奏会を敢行することは、経済的・精神的に大きな負担であったに違いない。彼女らは苦境を乗り越えた。7月、土屋宗太(7/4)や増田純奈(7/17)ら若い世代のピアニストの活躍が目立ち、一方で、名フィルのトップ・フルーティスト富久田治彦が振替公演として、マルティヌー、ライネッケ、プーランク、プロコフィエフ、という四曲のソナタで、隙のない濃密な時間を作り上げた(7/16)。ベートーヴェンピアノソナタ連続演奏会を敢行する石川馨栄子は、シリーズ第一回を9月に延期し、演目も変更して、30番、31番、32番の深い精神世界を硬質かつ柔軟な表現力で弾ききった(9/26)。名古屋市民芸術祭2020参加でリサイタルを行った飯田愛美は素晴らしいテクニシャンであるものの、リストの難曲にあっても技巧に流されず、深い精神性を掘り起こした(10/31)。ニンフェールの企画による森川栄子の「声の行方・言葉の力」では、アリベルト・ライマン、ジョルジュ・クルタークの独唱曲とともに久留智之、伊藤美由紀、水野みか子の作品が歌われた。ピアノ等の楽器は無く、6曲全て声のみの作品を、それぞれの作風に沿った声質でみごとに表現した(12/20)。

オンライン企画も徐々に充実した。4、5月ころは、未だ、通信上の遅延や音質・画質の調整、配信パフォーマンスの企画デザイン等、技術的トラブルや思わしくない構成などが目立ったが、秋からは良質な配信企画も現れた。岐阜サラマンカホールでのパフォーマンス「ぎふ未来音楽展2020三輪眞弘祭 -清められた夜-」は三輪の新作《鶏たちのための五芒星》やJ・オケゲムのレクイエムを人工音声で歌う場面などで構成された。リアルタイムで松井茂の詩が視聴者にメール配信されたり、巧みなカメラワークで工夫をこらしたりして3時間配信しつづけた(9/19)。名古屋市文化振興事業団がアーティストとコラボするワークショップシリーズ「ボッシブ@webNAGOYA」はユニークな参加型企画だった。Nagoya Electronic Music Concerts2020は、遠隔地にいる作曲家とのリアルタイム対話を挟みながら、フィクストメディアおよびライブ・パフォーマンスをクオリティの高い音質・画質で名古屋から配信した(12/13)。